

『あいち国文の会』のあゆみ（十六）

令和三年度の一年も、前年よりのコロナ禍により数少ない開催であった。

第三〇回 上田正子氏（元 東海学院大 教授）

ことばを発するメカニズム―ことばが音声になるまで―
（令和3・8・25）

ことばは人間だけに与えられた高次な機能の一つで、意思や感情を伝達する手段である。このことばがどのように生み出され、言語音声となって発せられるのかその過程について考える。

ことばは大脳の言語中枢により産生される。話しことばだけでなく、聴いて理解すること、文字を読んで理解すること、字を書くことなども言語中枢の働きによって行われる。

脳の中のことばを音声に変換するには、①肺からの呼吸によって声帯を振動させ、②構音器官である舌、下顎、口唇、口蓋垂などを動かして咽頭、口腔の形を変化させ、喉頭でつくられ

た音（喉頭原音）に語音としての特性を与えることよって行われる。

発声・発語・発音のメカニズムを音声例や構音動作の具体例を挙げながら解説した。
（上田正子記）

第三〇回 加藤 彩氏（豊田高専 非常勤講師）

中島敦「斗南先生」における〈笑い〉

（令和3・10・20）

中島敦の第一作品集『光と風と夢』（筑摩書房、一九四二（昭和十七）年七月）に収録された「斗南先生」は、敦の伯父・中島端を題材とした小説作品である。その作品構成に注目すると、一九三二（昭和七）年、一九三〇（昭和五）年、一九四二（昭和十七）年と、語り手である『三造』

第三〇回 佐藤友彦氏（和泉流狂言師）

の伯父が亡くなった年を中心に、「球根」のような構成となっていることが分かる。『三造』は、死に際した伯父の言動に「幼芽」のように柔らかく動かされてしまった心に、伯父に対する批判を「鱗片葉」の如く重ねて行く。さらに伯父の死から十年後、太平洋戦争下を視座として見出した伯父への新たな評価が、「幼芽」と「鱗片葉」を包む「外皮」のように小説を覆っている。「斗南先生」における伯父への批判や評価は、「笑い」と滑稽さを纏いながら重なっていることが分かる。ベルグソン『笑―をかしみの意義についての試論』（岩波文庫、林達夫・訳、一九三八（昭和十三）年二月）で『笑には情緒より以上の大敵はない。』と指摘されているように、「斗南先生」における「笑い」は、伯父にまつわる情緒を抑え、伯父から距離をとるための一つの方法と考えられる。（加藤彩記）

名古屋の〈狂言共同社〉のこと（令和4・1・12）

中世には、大和・丹波・近江・宇治等都周辺に猿楽を演ずるグループが活動していた。が、

吸収、合併などもあり、室町時代には大和猿楽四座が有力であった。この四座に属さないいくつかの座も存在していて、和泉流狂言山脇家は（由緒書によれば）近江坂本の佐々木岳楽軒を祖とする鳥飼座から出ているらしい。

この山脇家は八代山脇元賀の時、明治維新の動乱を迎え、明治二年身分改正、職制改まり、明治五年禄高十分の一の七石六斗になり、翌六年士族となるも禄高半額となる。住居は上笹島町七代藩主宗春の娘頼君の屋敷跡を、五代元喬の代に拝借したものであり、邸内には白鳥払い下げ木材で建立された舞台があったことでも、旧名古屋藩と深いつながりを持っていた。（藩お抱え）。

他に名古屋には

早川幸八家

野村又三郎家

山脇（佐々）藤左衛門家

山脇得平家

があり、それぞれ弟子を持っていたが、明治十一年四月五日喜多六平太追善会における〈望月〉の間を野村又三郎の代勤として田中庄太郎が勤めたことに依り、宗家元清より同日出勤の

角淵、井上、田中に芸事差し止め処分がなされ、十月十二日の早川幸八追善狂言会には家元関係者の出演が全くないことから、家元に対する反撥があり、元清一人孤立することになったらしい。これが明治二十四年の狂言共同社の結成となったと思われる。

狂言共同社結成の当初から、決められていたこと、全員出席、全員奉仕・全て合議によること、は今に続いている。

佐藤氏尊父のことは「プロでやると芸がいやしくなる」は、私の耳に残ったことばであった。

(野崎典子記)